

小石川分館館外ラボラトリー

外部環境での博物館活動 —小石川分館における「ソトラボ」の試み

松本文夫¹・鶴見英成²・成瀬晃司³・金崎由布子⁴・永井慧彦⁵

総合研究博物館小石川分館で2022年3月から「ソトラボ」と称する館外ラボラトリー活動が始まった。本稿ではその企画経緯と実施内容について報告する。

小石川分館は2021年1月から臨時休館中である。旧東京医学校本館（1876年創建）を前身とする当館は、2020年に行われた耐震基礎診断で耐震性能が不十分である可能性が判明した。この結果から耐震性能の確保が確認できるまでの間、一般公開を中止することになった。施設と収蔵物の維持管理は続くものの、スタッフは建物から退去し、主要業務は本郷キャンパスの分館分室で行われている。今後の流れとしては、旧東京医学校本館の保存活用計画が策定され、さらなる耐震診断による調査検討を経て、耐震補強・修理工事の対応がなされる見込みである。

本郷本館、インターメディアテック、宇宙ミュージアムTeNQとならび総合研究博物館の4館体制の一翼を担ってきた小石川分館は、こうして長期にわたり非公開となる。この状況を受けて、当館の西秋良宏館長および遠藤秀紀教授より、小石川分館において何らかの博物館活動を継続することが提案された。一般の来場者を建物内に入れることはできないが、外部環境を生かしたイベントであれば開催可能である。小石川分館に隣接する小石川植物園（理学系研究科附属植物園）との連携も考えられる。

小石川分館の周縁部や小石川植物園の庭園をいかした見学・解説・上映などの公開活動が検討された。その内容にはいくつかの方向性が考えられる。第一に東京大学最古の学校教育施設としての特性をいかした「建築案内」、第二に総合研

究博物館に収集された学術標本を介して研究成果を知る「標本案内」、第三に映像／写真の記録からさまざまな分野の研究者の活動に迫る「映像講話」である。

さらに、植物園と博物館のコラボレーションによるガイドツアーや屋外シンポジウムなどの企画も考えられる。外部で実施するイベントなので、梅雨、盛夏、厳冬の時期は避け、雨天時は延期し、およそ1～数ヶ月に一度の頻度で実際の企画を立てることになる。

博物館活動の名称は「ソトラボ」とした。ソト＝外部からの視点に着目した博物館の新しい公開実験と位置づけている。英文略称では分館(Annex)のexを「外部」の接尾辞と読み替え、AnnEX Lab.と表記した。正式名称は「東京大学総合研究博物館小石川分館館外ラボラトリー」(UMUT Koishikawa Annex Exo-Lab.)である。

一般に博物館はモノ・情報・人間が集まる独立施設である。総合研究博物館では基幹となる4館のほかに、小さな展示ユニットによる「モバイルミュージアム」を国内外の210ヶ所で展開してきた。

これは博物館の存在形式における「集中独立型」から「分散連携型」への拡張である。ソトラボはそのさらなる進化形と見てよい。モバイルミュージアムではモノが外に移動するが、ソトラボでは人間が外に出て動くことに特徴がある。博物館における内から外への転換、静態から動態への変化をともなう「外部動態型」ともよべる運用である。これまで施設内部に形成されてきた濃密な知のミクロコスモスは、集約されたモノたちが元来棲息していた世界へと開かれ、人々を積極的に外部環境へといざなう。対象領域を再定義することによって、博物館概念の新しい境地に踏みだせる。博物館と植物園が一体化した現在のロケーションにおいては、「ガーデンズ・アンド・アーカイブス※」としての醸成も期待される。(※名勝及び史跡「小石川植物園(御薬園跡及び養生所跡)」保存活用計画、2022年3月)

ソトラボの会場候補は、小石川分館の池側の外部空間、茗荷谷門周辺の広場／駐車場、植物園の日本庭園などである。



図1 ソトラボ第2回「小石川分館を外部から観る」の実施風景。

Ouroboros

大学施設部によるポーチの応急修理工事が予定されているので、会場設営には臨機応変な対応が必要になる。参加登録はウェブによる事前予約制とし、定員は15名（現在は20名）とした。イベントの開催時間は夕方の30分間である。以下に、これまでに実施した3回の概要を報告する。

ソトラボの第1回は2022年3月25日（金）に開催された。鶴見英成助教（現放送大学准教授）による「インカの旅路、アルパカ肉の味」は、南米ペルーの高地で2010年に実施した踏査の写真から構成したフィルムトークであった。鶴見助教は考古学の課題として古代における交通網に関心を持っていたが、文化人類学者たちとともに現代の高地の村々をめぐる、荷を運びリヤマなどの飼育状況や、そこに暮らす人びとの様子を間近で見ることにした。多数のリヤマで編成した伝統的なキャラバンを実見したり、その移動ルートの情報を聞いたり、ルート上の遺跡を訪ねたりする中で、古代の重要な交易品である黒曜石の産地を新たに見つけ、交易についての新たな視座を得た。人びとの衣食住、リヤマやアルパカの料理など、論文には反映されない研究現場の体験を写真や映像で示し、会場には採取した黒曜石の実物や、アルパカの毛皮を手でさわられるよう配置した。



図2 ソトラボ第1回のチラシ。

第2回は4月22日（金）に実施された。松本文夫特任教授による「小石川分館を外部から観る」と題する建築ウォークであった。植物園の日本庭園側から華やかなツツジに囲われた小石川分館の外観を鑑賞し、これまでに当館がたどってきた来歴を振り返った。小石川分館の建物は明治9年（1876）に東京医学校本館として現在の本郷キャンパス内に建設された。1911年には赤門の脇に移築されて史料編纂掛となり、このとき山口孝吉の改築設計により梁間と塔屋を縮小してほぼ現在の姿になった。1969年には植物園の現在地に移築、1970年に重要文化財に指定され、2001年から小石川分館として一般公開されてきた。東京大学で最古の学校教育施設であり、明治初期の擬洋風建築の特徴を残す歴史遺産である。2度の移築を経て機能と意匠を少しずつ変えながら生き長らえた施設である。実物と古写真／図面を見ながら、その「建築の持続」のありさまを通覧した。

第3回は5月27日（金）に実施された。本学埋蔵文化財調査室の成瀬晃司助教による「小石川御殿の堀遺構」と題する発掘トークであった。小石川植物園を含む一帯は、天和元年（1681）頃から正徳3年（1713）まで、幕府の御殿「小石川御殿」だった。元禄11年（1698）には西側および北側に拡張され、四周には幅約10間



図3 ソトラボ第2回のチラシ。

の堀と土居・石垣・多門が廻り、北西および南西角には隅櫓が築かれた。堀には千川上水から水を引き、御殿坂側には五段の瀧があったという。成瀬助教は小石川御殿の前史、成立、拡張、その後の経緯を紹介し、自らが関わった発掘の研究成果を写真と図面で解説した。惣堀位置の推定図を示し、小石川御殿図（文京ふるさと歴史館所蔵）などの古図からその構成を読み解いた。堀を穿って生じた土を盛って内側に土塁を築き、その上に堀を巡らせたのである。現在の風景に重ねながら、城郭を彷彿させる御殿の姿に想いをはせた。

各回ともに活発な質疑応答が行われ、小規模ながら密度の濃いイベントとなった。ソトラボは博物館のハコモノの概念を反転する試みであり、施設の内部に集中蓄積する志向とは逆向きであるようにみえる。しかし外部環境に遍在する知の痕跡に向き合うという点において、この試みが博物学の原点に通じていると考えたい。



¹本館特任教授／建築学、²放送大学准教授／アンデス考古学・文化人類学、³本学埋蔵文化財調査室助教／日本近世考古学、⁴本館助教／アンデス考古学、⁵本館特任研究員／金銅仏铸造



図4 ソトラボ第3回のチラシ。